

末黒野

すくろの

7月号 (通巻863号)





主宰退任に当たりて

松 本 三千夫

この四月をもちまして、第七代末黒野主宰を退任することとなりました。思えば、平成二十七年四月に三年間の約束で主宰を継承しましたが、あつという間の三年間でした。就任の挨拶で、「末黒野の更なる発展のために全力を尽くして励みたい。」と述べましたが、こうして三年間を振り返ってみると、皆様のご支援、ご鞭撻を頂きながら、何もできなかったことを恥ずかしく思うばかりです。そのような中でも、末黒野俳句会七十周年記念の行事や大会を挙行できたことは無上の喜びでした。また、年度大会で会計報告のできましたことも大変良かったとご協力を嬉しく思っています。ただ、高齢者社会という時代背景の中、会員増を計れなかったことを極めて遺憾な事と思っています。

ところで、この度名誉主宰を同人総会で仰せつかりました。誠に有り難いことです。新しい立場で皆様とまた「俳句を楽しむ」学んで参りたいと思います。皆様も大いに「俳句を楽しんで」下さい。ただ、「楽しみは困難や苦勞の次にある」ことを忘れないで下さい。そして、自分で選んだ道です。困難や苦勞を楽しむに変えるよう努めて下さい。芭蕉も、「俳諧は吟呻の間の楽しみなり」と言っています。吟じ悩み、あれこれ工夫を凝らすところに俳諧（俳句）の楽しみがあるということです。要は俳句を前向きに捉えるということです。

さて、いよいよ黒滝志麻子新主宰、森清堯新副主宰による末黒野の船出です。末黒野の更なる発展のために、ご尽力ご指導下さるようご祈念申し上げます。以上、主宰退任のご挨拶まで。

平成三十年四月

主宰就任に当たりて

黒 滝 志麻子



この度平成三十年四月一日の同人総会を経て、第八代末黒野主宰に就任することとなりました。一度はお断りしましたものの、七代にわたる主宰にお教えいただき長い道を歩んでまいりまして御恩返しをしなければと思ってお引受け致しました。

捨苗の束ごと根づき祭来る

皆川 白陀

石田波郷先生の「鶴」での「風切抄」に掲載され、白陀主宰の代表句にもなり、時代は変わっても佳句は古びたりは致しません。新しい句友も多くなりましたので書きました。

皆様と共に初代皆川白陀先生からの標榜であります「伝統的俳句を守る」「今を詠む」「平明で奥深い句意」を守り、前主宰の「笑顔で楽しく」も忘れてはなりません。

伝統は守るだけのものではなく、その時代に生きた伝統俳句でなければなりません。表現のしかたも変わってくると思います。

幹部同人はもとより、同人、誌友の皆様のご協力があつてこそ達成出来るもので、改めて更なる御支援をお願い申し上げます。

松本三千夫先生には、名誉主宰として、甲矢集、乙矢集に目を通して頂き句会の指導、幹部会、編集会議などに出席をお願い致しております。

なお、小川玉泉名誉顧問には、今まで通り、句会の指導をお願い致しております。

皆様と共に和をもって句会に望みたいと思います。どうぞ御協力のほどお願い申し上げます。

平成三十年四月

春日燦

松本三千夫

(名誉主宰)

万愚節万年筆のインク切れ
身を置くやフランス山の春日燦
母子像へ木洩れ日ゆたか暖かき
日時計に翅は休めず春の蝶
鳶の笛島を離れず花木五倍子
春愁や男にもある乳二つ
一人には春逝く渚長過ぎて
惜春の音となりゆく夜の雨

鶯

黒滝志麻子

里山の柵のほころび夕蛙
川下る船のしぶきや風光る
すぐ海へ出る川一つ風光る
大波のとどろく崖や紅椿
鶯や人の拓きて捨てし畑
湧水の流れとなりぬ花木五倍子
街中の灯のまたたきや木の芽冷え
年間へば片手出す子や董草
花咲くや両手ひろぐる豊かな樹
山寺へ坂ゆるやかや諸葛菜
有料の気象情報花の雨
籠垣の竹の青さを散る桜

若柳

森
清
堯

松が枝の影濃かりけり彼岸晴
まつすぐに黒ぐろと畝初燕
鷹化して鳩の依りたる大師堂
六郷の堤の高し鳥雲に
沢風の百花ふるはせ紫木蓮
校庭のポールを見詰め卒業子
縄を繕る納屋の翁や梨の花
力石の朱字の百貫桜東風
弥陀仏へ渡る朱の橋若柳
風せめぎ水のせめぎや花筏
崖上の御衣黄桜空の紺
青き淵次の風待つ花筏

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

初燕

森清信子

大師駅の朱の丸柱うらけし
長閑しや仲見世に買ふ夫婦箸
背にし合ふ子規虚子の句碑松の芯
春塵や信号多き旧宿場
一川の蛇行ゆるやか初燕
雲行きに潮照り翳り春の鴨
人声を吸ひこむ闇や春の星
清らなる光生みたり山葵沢
田起しの済む田済まぬ田群鴉
佐保姫の躑きにけり銀世界

花の雲

安斎久英

初蝶やこめかみ掠め髪に触れ
咲き満ちて甲斐路明るき桃の花
散るままに吹かるるままに花の山
花の雲橘媛の果てし沖
手廂に望む大島麗らけし
暖かや雲に溶け入る島の影
雁帰る浦賀水道波騒ぎ
降り出でて風情醸せり花ミモザ
黄梅を風吹き上ぐる傾りかな
咲くよりも散るを華やぎ花の下



魚影

石黒興平

一振りの鍬のきらめき耕せり
英連邦墓地の鉄扉や春の雪
静かなる三浦台地の霞かな
啓蟄や藍瓶の吐く泡ひとつ
機音の与謝の郡や梅香り
きらきらと遡上の魚影春の川
朱の橋の朱の水影や糸柳
春愁やビル影及ぶ遊女塚
東風わたるのみや六郷渡し跡
大寺の萱の撥ぬる春日かな

吟行

田中臥石

八鶴湖妻と歩めり花の雲
吟行や古い健啖の鱈鮨
初蝶を視野に白亜の製薬所
見送りに出づ春光のコンパニオン
九十九里の空を自在に揚雲雀
葉玉葱齒触りのよき酢味噌和
風船の空へ音符のやうに飛ぶ
次の世へ生くる蒲公英根強さよ
太東の岬の波や鰭釣
横浜より帰る独りへ蛙鳴く

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



紅しだれ

今村千年

しばらくは方丈の縁紅しだれ
風と来て風と戯る春の蝶
カンバスに食み出してをり紅しだれ
父祖の地のひと日を花と過ごしけり
春風も飴切る音も頬を撫づ
広重の描きし渡舟鳥雲に
ひたすらに育む俳誌風光る

花 筵

吉田きみえ

初 蛙

岡田史女

春のちり払うて壁の師の色紙
語らふは明日への気力花筵
花衣脱ぐや厨の灯にまみれ
裏山をせめぐ風音春寒し
母の忌の桜咲く墓立ち去れず
春めける山際うるむ明けの月
風音に目覚めぬ明けの春の月

花なづな荒鋤きの土黒々と
たんぽぽや暗渠を出づる水の音
ひとひらの花の舞ひこむ自動ドア
真菰生ふ鉄気の水のをちここに
山よりの水の幽し初蛙
春昼や身の鈍きこと声に出て
燕とぶ棚田に水のゆきわたり

目借り時

岡野里子

欄干の梵字二十字風光る
巾広き大師の背や春の風
霊場の八十八碑雀の子
平間寺の四国巡りや空青き
金色の露坐の弥陀仏青柳
川端の日向日影の桜かな
寄する波引く波の音目借り時

津軽訛

小田嶋野笛

古草の匂ふ月極め駐車場
初蝶や空き家に隣る侘住ひ
春耕の鋤は地球を廻すかに
津軽訛南部訛や雁供養
みちのくのものみな眩し雪間草
まぜこぜの花の種蒔く現世かな
足出づる蝌蚪は群れより逸れたがる

麦青む

加藤静江

俳聖の句碑一握の麦青む
無縁塚のくれなゐ深き落椿
風光る浮島占むる鷺一羽
鶯や影の瘦せたる柞山
囀や寺裏の土軟らかく
ひとひらと謂へど落花や大手門
戦災の慰霊碑寂と花あかり

紅しだれ

菅野日出子

箱庭めく村に桜の大樹かな
地虫出づ世のきびしさを知らずして
我が町の小さき鎮守や紅しだれ
あと幾度この花見んと池の端
さらさらと風のいなせる花馬酔木
昨夜の星落ちて開くやいぬふぐり
鳥鳴くや葺替終へし園の茶屋

青炎集

松本三千夫選

横浜 片岡さか江

鳳輦という名珍し牡丹の芽
地図なぞり花の遅速を夫の言ふ

ふるさとの訛を耳に花の旅

花衣脱ぐや厨の人となり

出航の銅鑼の音突と花の昼

父と子とズボンめくりて蝌蚪の川

横浜 太田良一

多摩川を上る潮の香春の風

投釣りの棹の撓ふや四月くる

春惜しみ別れを惜しみ芭蕉句碑

鶯の啼く声聞けり里の餅

男の子より高くぶらんこ女の子

鳥帰る山に図面の測量士

横浜 小野弘正

白帝城の鯀の復座や若緑

青空や岩間岩間の鼓草

朝刊に塾のちらしや春休み

気ままなる富士の湧水花曇

湧き水に右往左往や花筏

縄や赤き宅地へ杭を打つ

横浜 布施由岐子

あるなしの色つきみたり春の山

青帝や堤の青の繋がりて

駅舎への出入り自由や初燕

鶯の恋路となりぬ切り通し

生くるとは迷ふことなり蜚の道

春服や蝶にはなれぬだんご虫

横浜 小林清子

初つばめ三浦按針ゆかりの地

手を振つて橋渡りけり花月夜

歓迎の蛙の歌や花の国

満席のフラワートレイン八重桜

一輪の白山吹や蝶のごと

指先で二度程味見木の芽和

狭山 沼崎 千枝

蠶やトラクターへもベンツへも

シャッター街パン屋の香りうらけし

やどかりのころりと消え潮溜り

家苞の鎌倉銘菓春夕焼

舞殿の笛伸びやかや春の宵

珈琲と卵サンドや花の土手

横浜 椎名 文子

梅祭乙女もてなす立礼茶

朝東風や土の湿りの草野球

快晴の芽吹きや山や男坂

満開の花を映すや忘れ水

澗声や空の青さの花筏

葉桜や風吹き抜くる長屋門

横浜 細島 孝子

句心も遊び心や梅真紅

春寒し客待ち車夫と段葛

売り物件増えたる通り春さむし

一粒の水滴きらり春立てり

片栗の花敷きつめて山を抱く

立春の大地に沁みぬ昨夜の雨

横浜 三橋 玲子

句鳥の頻りや寺領和みくる

休み田の土啄めり初つばめ

小綬鶏の高音につられ三千歩

無為の日や紙風船の音重く

ゴム風船開かずの踏切ひとつ飛び

日輪に吸ひ取られたりゴム風船

横浜 川西 栄江

木洩れ日に紛れ消えたる胡蝶かな

留守電に声を残して花の昼

晚鐘の一韻の欲し飛花落花

花屑の川面に大きハート型

げんげ田を過る車窓や一輛車

一景を整へ銀杏芽吹くかな

横浜 北郷 和顔

紅梅の咲いて華やぐ海鼠壁

叢林の闇へはくれんささめごと

月光にあやしく戦ぐ花万朶

桜田門の桜散り初むビルの風

若葉萌ゆ柞の森の裾模様

ふるさとを手繰り寄するや遠蛙

耕 土 集

黒滝志麻子選



声援を待つや芝焼く競馬場
クレーンはキリンのごとし長閑なる

新潟 五味 紘子

鳥居抜くる穴守權荷初取出つ

彼方此方の光の中を桜かな

白木蓮光放ちて空突けり

路味噲や新の字を貼らる包み紙

平塚 尾崎千代一

囀の奥社へ登る宮司かな

ていねいに螺旋へ灌ぐ甘茶かな

潮風の届く木椅子や花の陰

花見つつアールグレイや砂時計

白球の快音春の空へ打つ

神奈川 太田 利明

春風を詰め新しきランドセル

いくたびも春日を返す観覧車

眠き目に朝市の空長閑なり

足並みを妻と揃へて桜狩

梢ゆらす名残りの雪の別れかな
寄り添うて日向の猫や縁のどか

横浜 秋山 文子

鶴首の一輪挿しや紅椿

花ミモザ満つる仕合せ色と夫

春灯赤毛のアンの本古りて

雪晒麻織物の鮮やかに

横浜 中野 大樹

連翹の黄際立つる垣根かな

伸びやかに息吹あふるる花菜活く

花木瓜や名は悲しくも咲き誇る

雪洞に花の風情や浮かび出づ

鍬置きて背伸ばす媼山笑ふ

西東京 河口 知重

振袖に希望はらませ卒業子

挨拶の酒宴の盃に散る桜

春のどか駅弁売の声高し

春は行く子は又来ると帯広へ

れんげ草

小川 玉泉

(名譽顧問)

上げ潮に乗りてたゆたふ花筏
老鶯の三声に終はる朝ぼらけ
一尺を超えて咲きそむ鉢の藤
輪を描きつつ海目指す春の鳶
菜園の端のひと畝れんげ草
夏めける日差しを浴びて車輪梅

雑記帳 12

此のところ季節の変化の激しさに、悩まされる毎日である。四季の変化の正しさに、縋ってきている俳句にも影響が出ているように思う。季語の使い方には注意が必要になる。